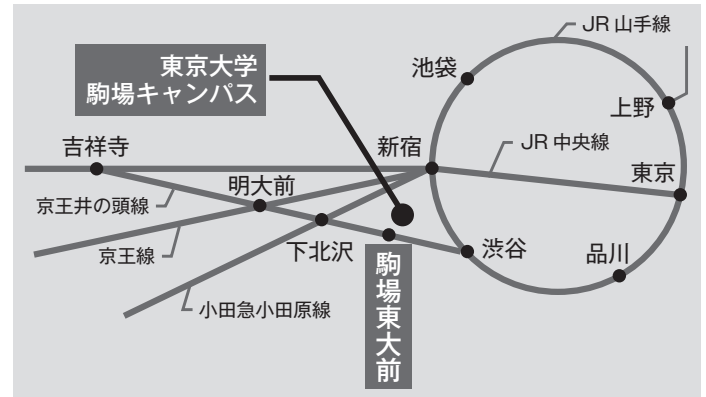


日本中国学会 第七十回大会要項

期 日 二〇一八年十月六日(土)・七日(日)
会 場 東京大学駒場キャンパス



〈大会会場〉

東京大学駒場キャンパス

【アクセス】

JR 渋谷駅から京王井の頭線（吉祥寺方面行各駅停車）に乗り、駒場東大前駅で下車、東口（渋谷寄り）から徒歩0分。

※急行は停車しませんのでご注意ください。

※エレベーターは西口にのみ設置されています。

※小田急線下北沢駅・京王線明大前駅でも京王井の頭線に乗り換え可能です。

〈懇親会会場〉

コミュニケーションプラザ南館（生協食堂）2階

※大会会場は東京大学本郷キャンパスではありません。

ご注意ください。

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部中国語中国文学研究室内

日本中国学会第70回大会準備会

TEL / FAX 03-5841-3823

※当日連絡先 050-5806-9623

E-mail japansinology70@gmail.com

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第七十回大会を、来る十月六日（土）及び七日（日）の両日にわたり、東京大学駒場キャンパスにて開催いたします。万障お繰り合わせのうえ、ご参加くださいますようお願い申し上げます。第七十回にあたり、記念のシンポジウムその他の企画を準備いたしております。

ご参加の方は、同封の振込用紙を使用し、必要な項目に○印をつけ、合計振込金額をご記入のうえ、二〇一八年九月十四日（金）までにお振り込みください。消印は九月十四日までを有効とし、振替受領証をもって領収書に代えさせていただきます。振替受領証は、諸会費支払い済みの証明書として受付にてご提示いただく必要がありますので、大会参加の際にはお忘れなくご持参いただきますようお願いいたします。

敬具

二〇一八年八月十八日

日本中国学会理事長

土田健次郎

第七十回大会準備会代表

大木康

会員各位

※各種委員会教室（1号館）

大会委員会：115 出版委員会：116 論文審査委員会：114

研究推進・国際交流委員会：118 広報委員会：119

選挙管理委員会：117 将来計画特別委員会：120

◆学会事務局/大会準備会控室 21KOMCEE West 301

◆休憩室 21KOMCEE West 地階 MM ホール及びカフェテリアスペース
(カフェテリアは休業)

◆手荷物預かり (6日) 1号館 107教室

(7日) 21KOMCEE East 入口ロビー

※6日(土曜日)の手荷物預かり所は、午後6時で終了いたします。シンポジウム・総会の後にお引き取りいただき、懇親会会場にお進みください。懇親会会場には荷物置き場を設けます。

◆書店・出版社展示 21KOMCEE East 214



1号館



21KOMCEE East



21KOMCEE West

日本中国学会第七十回大会

2018年10月5日(金)～7日(日)

日	時	行 事	会 場
5日 (金)	13:00	理事会	駒場ファカルティハウス (国際学術交流会館) セミナー室
	15:00	次期評議員会	駒場ファカルティハウス (国際学術交流会館) セミナー室
	15:45	評議員会	駒場ファカルティハウス (国際学術交流会館) セミナー室
6日 (土)	9:30	受付開始	1号館 108教室
	10:00	開会式	第四会場 21KOMCEE West レクチャーホール
	10:30～ 12:00	研究発表 I. 哲学・思想部会 II. 日本漢文部会 III. 文学・語学部会 IV. 文学・語学部会	(各会場) 第一会場 21KOMCEE East 211 第二会場 21KOMCEE East 212 第三会場 21KOMCEE East 213 第四会場 21KOMCEE West レクチャーホール
	12:20	記念撮影	1号館前(雨天の場合 21KOMCEE West レクチャーホール)
	12:30	各種委員会	1号館1階各教室
	14:00	記念シンポジウム	第五会場 900番教室(講堂)
	16:30	総会	第五会場 900番教室(講堂)
	18:00	懇親会	コミュニケーションプラザ南館 (生協食堂) 2階
	7日 (日)	9:30	受付開始
10:00～ 12:00		研究発表 I. 哲学・思想部会 II. 文学・語学部会 III. 文学・語学部会 IV. 次世代シンポジウム	(各会場) 第一会場 21KOMCEE East 211 第二会場 21KOMCEE East 212 第三会場 21KOMCEE East 213 第四会場 21KOMCEE West レクチャーホール
12:00		理事会	駒場ファカルティハウス (国際学術交流会館) セミナー室
13:00～ 15:00		研究発表 II. 日本漢文部会 III. 文学・語学部会 IV. 次世代シンポジウム	(各会場) 第二会場 21KOMCEE East 212 第三会場 21KOMCEE East 213 第四会場 21KOMCEE West レクチャーホール
15:10		閉会式	第四会場 21KOMCEE West レクチャーホール

研究発表・各種委員会等

	第一会場 21KOMCEE East 211	第二会場 21KOMCEE East 212	
6日 (土)	10:00～10:20	【開会式】 21KOMCEE West レクチャーホール	
		哲学・思想部会	日本漢文部会
	10:30～11:00	I-1 横山裕 (14)	II-1 王侃良 (20)
	11:00～11:30	I-2 黒崎恵輔 (15)	II-2 許家晟 (21)
	11:30～12:00	I-3 李麗 (16)	II-3 韓淑婷 (22)
	12:20～	【記念撮影】 1号館前(雨天の場合 21KOMCEE West レクチャーホール)	
	12:30～	【各種委員会】 1号館1階各教室	
	14:00～	【記念シンポジウム】 第五会場 900番教室(講堂)	
	16:30～	【総会】 第五会場 900番教室(講堂)	
18:00～	【懇親会】 コミュニケーションプラザ南館(生協食堂)2階		
7日 (日)		哲学・思想部会	文学・語学部会
	10:00～10:30	I-4 溝本章治 (17)	II-4 段書暁 (23)
	10:30～11:00	I-5 劉珉 (18)	II-5 祝世潔 (24)
	11:00～11:30	I-6 王雯璐 (19)	II-6 関俊史 (25)
	11:30～12:00		II-7 剣持翔伍 (26)
	12:00～13:00	【理事会】 駒場ファカルティハウス(国際学術交流会館)セミナー室	
			日本漢文部会
	13:00～13:30		II-8 松村茂樹 (27)
	13:30～14:00		II-9 下田章平 (28)
	14:00～14:30		II-10 廖海華 (29)
	14:30～15:00		II-11 青山大介 (30)
15:10～	【閉会式】 21KOMCEE West レクチャーホール		

の会場・時間帯一覧表

	第三会場 21KOMCEE East 213	第四会場 21KOMCEE West レクチャーホール	
6日 (土)	10:00～10:20	【開会式】 21KOMCEE West レクチャーホール	
		文学・語学部会	文学・語学部会
	10:30～11:00	III-1 劉斯倫 (31)	IV-1 呉雨彤 (42)
	11:00～11:30	III-2 林暁光 (32)	IV-2 中原理恵 (43)
	11:30～12:00	III-3 李墨宇 (33)	IV-3 頼思好 (44)
	12:20～	【記念撮影】 1号館前(雨天の場合 21KOMCEE West レクチャーホール)	
	12:30～	【各種委員会】 1号館1階各教室	
	14:00～	【記念シンポジウム】 第五会場 900番教室(講堂)	
	16:30～	【総会】 第五会場 900番教室(講堂)	
18:00～	【懇親会】 コミュニケーションプラザ南館(生協食堂)2階		
7日 (日)		文学・語学部会	次世代シンポジウム
	10:00～10:30	III-4 戦暁梅 (34)	IV-4 【パネルディスカッション】(45) ○佐藤大志・陳翀・中木愛・川島優子・高西成介(○印は代表者)
	10:30～11:00	III-5 孟夏 (35)	
	11:00～11:30	III-6 張洋 (36)	
	11:30～12:00	III-7 蕭涵珍 (37)	
	12:00～13:00	【理事会】 駒場ファカルティハウス(国際学術交流会館)セミナー室	
		文学・語学部会	次世代シンポジウム
	13:00～13:30	III-8 種村由季子 (38)	IV-5 【パネルディスカッション】(47) ○小松謙・井口千雪・岡崎由美・松浦智子(○印は代表者)
	13:30～14:00	III-9 鈴木政光 (39)	
	14:00～14:30	III-10 渡部雄之 (40)	
	14:30～15:00	III-11 趙傾宇 (41)	
15:10～	【閉会式】 21KOMCEE West レクチャーホール		

※氏名欄の(数字)は発表要旨掲載頁

◆諸会費

- ・大会参加費 2,500円(事前申込の場合2,000円)
- ・懇親会費 5,000円(院生2,500円)
- ・昼食弁当 1,000円/一食
- ・写真代 1,000円

◆ご案内

- ・キャンパス内は全面禁煙です。ご協力をお願いします。
- ・6日(土)はコミュニケーションプラザ内の生協食堂及びレストラン イタ

リアントマト、7日(日)はイタリアントマトのみ営業しています。キャンパス周辺の飲食店はわずかです。

- ・21KOMCEEの各教室は飲食禁止です。飲食は定められた場所をお願いいたします。
- ・6日の各種委員会、7日の理事会の出席者には昼食弁当が出ますので、お申し込み頂くには及びません。
- ・臨時託児室のご案内は56～57頁をご覧ください。
- ・構内の駐車場は利用できません。公共交通機関をご利用ください。
- ・6日(土)昼の記念撮影は1号館前で行います。かつての一高入学のクラス写真もこの場所で撮影されています。ふるってご参加ください。

日本中国学会第七十回大会プログラム

I 第一会場 (21KOMCEE East 211)

十月六日(土) 午前 哲学・思想部会

I-1 秦末漢初の法家思想における「度」と「道」に関する一考察
—君主の恣意的行為の規制をめぐる— (十時三十分～十一時)

横山 裕 (九州保健福祉大学)

司会 弼 和順 (北海道大学)

I-2 經典編纂材料としての「記」について—「凡例」の事例を中心に— (十一時～十一時三十分)

黒崎 恵輔 (早稲田大学大学院)

司会 井ノ口 哲也 (東京学芸大学)

I-3 陳元賛『老子経通考』に見られる林希逸『老子虞齋口義』批判 (十一時三十分～十二時)

李 麗 (名古屋大学大学院)

司会 松下 道信 (皇學館大学)

十月七日(日) 午前 哲学・思想部会

I-4 朱子晩年の意義 (十時～十時三十分)

溝本 章治

司会 垣内 景子 (明治大学)

I-5 龍場前後における王陽明の精神的变化について (十時三十分～十一時)

劉 珉 (早稲田大学大学院)

司会 林 文孝 (立教大学)

I-6 マニラ刊行『無極天主正教真伝実録』(二五九三)の研究

—同時代カトリック教理書との関連を中心として— (十一時～十一時三十分)

王 雯璐 (東京大学大学院)

司会 葛谷 登 (愛知大学)

II 第二会場 (21KOMCEE East 212)

十月六日(土) 午前 日本漢文部会

II-1 荻生徂徠の「訳文の学」における詩文論用語について—「文理三昧」を中心に— (十時三十分～十一時)

王 侃良 (名古屋大学大学院)

司会 高山 大毅 (駒澤大学)

II-2 『孫子国字解』と荻生徂徠の兵学思想 (十一時～十一時三十分)

許 家晟 (早稲田大学非常勤講師)

司会 高山 大毅 (駒澤大学)

II-3 佐久間象山の『喪礼私説』について―幕末における『家礼』受容の一例―(十二時三十分～十二時)

韓 淑婷(九州大学大学院)

司会 吾妻 重二(関西大学)

十月七日(日) 午前 文学・語学部会

II-4 新しい英雄の誕生―科学小説から見る清末中国における想像力の変容―(十時～十時三十分)

段 書暁(早稲田大学大学院)

司会 武田 雅哉(北海道大学)

II-5 「モノ」を語る新文学―一九二〇年代の張資平―(十時三十分～十一時)

祝 世潔(京都大学大学院)

司会 松岡 純子(長崎県立大学)

II-6 王僧虔の位置―書論と音楽論の分析から―(十一時～十一時三十分)

関 俊史(早稲田大学大学院)

司会 成田 健太郎(埼玉大学)

II-7 唐代における蔡邕書法の評価とその影響(十一時三十分～十二時)

劍持 翔伍(筑波大学大学院)

司会 成田 健太郎(埼玉大学)

十月七日(日) 午後 日本漢文部会

II-8 ポストン美術館所蔵岡倉天心旧蔵漢籍について(十三時～十三時三十分)

松村 茂樹(大妻女子大学)

司会 山口 謡司(大東文化大学)

II-9 中国書画碑帖の日本流入に関する一考察―收藏家・菊池惺堂を起点として―(十三時三十分～十四時)

下田 章平(相模女子大学)

司会 陳 捷(東京大学)

II-10 平田篤胤の易学(十四時～十四時三十分)

廖 海華(北海道大学大学院)

司会 竹村 英二(国士舘大学)

II-11 安井息軒「辨妄」の忠孝観念とその近代的意義

―井上毅、井上哲次郎との共通点―(十四時三十分～十五時)

青山 大介(湖南大学)

司会 竹村 英二(国士舘大学)

Ⅲ 第三会場 (21KOMCEE East 213)

十月六日(土) 午前 文学・語学部会

Ⅲ-1 『守先閣藏書志』と陸心源の蔵書目録編纂について（十時三十分～十一時）

劉 斯倫（慶應義塾大学大学院）
司会 古勝 隆一（京都大学）

Ⅲ-2 漢魏六朝時代における騷体賦の変貌―本文生成と文体選択の二重視座から―（十一時～十一時三十分）

林 暁光（九州大学）
司会 釜谷 武志（神戸大学）

Ⅲ-3 蕭衍父子の楽府詩と齊梁の文学（十一時三十分～十二時）

李 墨宇（東京大学大学院）
司会 釜谷 武志（神戸大学）

十月七日（日）午前 文学・語学部会

Ⅲ-4 寿蘇会・赤壁会と富岡鉄斎が描く蘇東坡（十時～十時三十分）

戦 暁梅（東京工業大学）
司会 池澤 滋子（中央大学）

Ⅲ-5 『新編酔翁談録』考―「酔翁」および編者の問題を中心として―（十時三十分～十一時）

孟 夏（広島大学大学院）

Ⅲ-6 万暦年間における『琵琶記』版本の流伝―『重校琵琶記』を中心として―（十一時～十一時三十分）

司会 鈴木 陽一（神奈川大学）
張 洋（山口大学大学院）
司会 土屋 育子（東北大学）

Ⅲ-7 『風俗女西遊記』に見る『西遊記』の影響（十一時三十分～十二時）

蕭 涵珍（中興大学）
司会 磯部 彰（東北大学名誉教授）

十月七日（日）午後 文学・語学部会

Ⅲ-8 李嶠「宝剑篇」創作考―昇仙太子の剣を手がかりとして―（十三時～十三時三十分）

種村 由季子（九州大学専門研究員）
司会 和田 英信（お茶の水女子大学）

Ⅲ-9 温庭筠の望郷詩について―水辺の夢―（十三時三十分～十四時）

鈴木 政光（東北大学大学院）
司会 和田 英信（お茶の水女子大学）

Ⅲ-10 言語に対する欧陽脩の信と不信―慶暦期における詩風と文風の違いを中心に―（十四時～十四時三十分）

渡部 雄之（広島大学大学院）
司会 浅見 洋二（大阪大学）

Ⅲ-11 黄遵憲の詩作における『日本雑事詩』改訂の位置づけ（十四時三十分～十五時）

趙 慎宇（京都大学大学院）
司会 小川 恒男（広島大学）

IV 第四会場 (21KOMCEE West レクチャーホール)

十月六日(土) 午前 文学・語学部会

IV-1 小説『水滸伝』と明代伝奇『水滸記』における閻婆惜(十時三十分～十一時)

呉 雨彤(京都大学大学院)

司会 笠井 直美(名古屋大学)

IV-2 諏訪市博物館蔵『忠義水滸全伝』について―江戸時代の白話受容と水滸伝版本流伝―(十一時～十一時三十分)

中原 理恵(京都大学大学院)

司会 笠井 直美(名古屋大学)

IV-3 九天玄女授天書考―『水滸伝』からの考察―(十一時三十分～十二時)

頼 思好(東京大学大学院)
司会 二階堂 善弘(関西大学)

十月七日(日) 午前 次世代シンポジウム

IV-4 いま『文選』を読む―中国古典文学の規範とその距離―(十時～十二時) ○佐藤 大志(広島大学)

陳 獅(広島大学)

中木 愛(龍谷大学)

川島 優子(広島大学)

高西 成介(高知県立大学)

十月七日(日) 午後 次世代シンポジウム

IV-5 武人・武官と文学(十三時～十五時)

○小松 謙(京都府立大学)

井口 千雪(九州大学)

岡崎 由美(早稲田大学)

松浦 智子(神奈川大学)

V 第五会場 (900番教室)

十月六日(土) 午後 第七十回大会記念シンポジウム(十四時～十六時三十分)

世界的視野から見た中国学

グローバルな視野から中国哲学を考える

シノロジーから言語科学まで―ヨーロッパの中国語学の多様性―

マイケル・ピュエット(ハーバード大学)

クリスティーン・ラマル(INALCO)

司会 中島 隆博(東京大学)

1-1 秦末漢初の法家思想における「度」と「道」に関する一考察―君主の恣意的行為の規制をめぐる―

横山 裕（九州保健福祉大学）

韓非は、先行する法家思想を集大成して君主を頂点とする法至上主義的統治理論を完成させるも、「法術の士」の登用や法自体の運用面において、法に反する君主の恣意的行為を排除できない理論的欠陥を残した。これにより、いかにして法に反する君主の恣意的行為を規制するかが法家思想の次なる課題となった。そこで、韓非以後の法家は、韓非とは別に法思想を含む多様な思想を説いていた『管子』に着目し、そこに展開されている「度」から「道」へと変化した君主規制の概念に注目したと考えられる。

その過程の一端は馬王堆漢墓『卷前古佚書』において道法折衷思想として見ることが出来る。『卷前古佚書』の道法折衷思想は、「度」と「道」とを提出することによって法に反する君主の恣意的行為を規制するものであった。その理論的背景は『管子』の「度」にあった時令思想の応用である。

しかしながら、時令思想に基づく「道」の採用は法思想に形而上的議論を発生させ、現実政治への対応を重視する従来の法家であり方から大きく乖離する。「道」を法家の視点で議論した解老篇、喻老篇、主道篇、揚権篇は『韓非子』に収録され、漢代に『史記』において『韓非子』が「其れ黄老に本づく」と評される原因となったと推測される。

一方で、法に反する君主の恣意的行為を規制する手段であった「度」を「道」へと形而上的議論にあげず、あくまで「度」としての理論を採求した形跡も認められる。『韓非子』有度篇や『呂氏春秋』似順論有度に見られる議論である。

本発表では、韓非以後の法に反する君主の恣意的行為の規制をめぐる『韓非子』『管子』『卷前古佚書』『呂氏春秋』等で展開される「度」と「道」との二つの議論を考察することによって秦末漢初の法家思想の特徴について卑見を呈してみたい。

1-2 經典編纂材料としての「記」について―「凡例」の事例を中心に―

黒崎 恵輔（早稲田大学大学院）

いったい、経書『礼記』四十九篇は、どのような思想を受けて編纂され、叢書としての『礼記』から書物としての『礼記』へと集成し、いつごろ礼を代表する經典として認められたのであろうか。

かつて津田左右吉は、「礼記及び大戴礼記の編纂時代について」（『儒教の研究』第一、岩波書店、一九六五年）において『礼記』及び『大戴礼記』の編纂上の諸問題を論考して、『漢書』芸文志に記録される「記百三十一篇」とは、礼の「経」でも「伝」でもなく礼を説いた書物が「記」の名で呼ばれ、これが叢書として整理されたものだとの見解を示した。そうであるならば、『礼記』、『大戴礼記』の各篇を構成する原資料であるところの「記」が、如何なる特徴を有するものであったかを、まず解明しなければならぬ。

本発表では、現在通行する『礼記』、『大戴礼記』本文中の凡字から始まる各条文を分析し、これらが「記」を特徴づける一種の体裁と認めうることを論証する。こうした「発凡」については、つとに杜預『春秋左氏経伝集解』および『春秋釈例』によって、『左氏伝』中の凡例とは、周公が制作した礼の規範を記録する文書に基づいているとの認識が示されている。杜預が見いだした「五十凡例」や、他の儒家系文献なども比較しながら、『礼記』に採られた「発凡」の特徴について考察する。

以上の論考によって、「雑」なる性格を有する『礼記』四十九篇が、叢書としての『礼記』から、如何にして、經典として承認されるテキスト構成に至ったかという編纂工程の一端が明らかとなるであろう。

陳元贊(一五八七—一六七二)は後半生の約五十二年間を日本で過ごし、詩、書、製陶など多方面に涉り日本文化に影響を及ぼした、江戸初期の著名人である。最新の研究では、元禄四(一六九二)年に荻生徂徠が「文理三昧序」(『訳文笠蹄後編』)で「虎白陳氏曰く、『日東の人載籍に博渉するは固より多きなり。然れども、能く文理と字義とを識るは則ち鮮なし』と。余斯の言を傳え聞きて、之を服膺すること日尚しきなり。遂に以て研究揣摩して其の説を得たり」と言う中の、「虎白陳氏」とは陳元贊のことで、徂徠の「古文辞」学の濫觴は陳元贊の啓発によるものとの考察がある。

『老子経通考』は陳元贊最晩年の作で、林希逸『老子虚齋口義』の『老子』解釈を批判し、当時の『老子』の初学者に資したものである。日本における『老子』受容の歴史は、江戸初期の林羅山の称揚により、南宋・林希逸の『老子虚齋口義』で『老子』を理解するのが大流行した結果、延宝三年刊『書籍題林』という目録では、『老子』が「儒家経書」の列に並べられるような時代になった。そのお蔭で多くの儒者が『老子』に注目するようになった。その後、徂徠学派の興隆により林注の再検討が行われた。林注批判と言えは、まず徂徠の「林希逸力口義ハ妄説杜撰太ダ多シ」(『経子史要覧』)「荻生徂徠全集」を想起するが、その実寛文十(一六七〇)年、陳元贊はすでに「希逸の口義を用いるは、是れ則ち庸士、理学の昏昧に非ずや」(『老子経通考』序)と指摘している。

発表者は陳元贊が林希逸の『老子虚齋口義』を批判した箇所に着目し、林希逸のどの点について批判しているかを明らかにする予定である。研究の途上、その有無観についての批判を考察した際に、陳元贊が老子の学こそ実学だと強調することに気づいた。『老子経通考』に「実学」の語の用例こそ少ないものの、意味において通ずる「実理」の用例を精査し陳元贊の実学思想について探ってみた。

I-4 朱子晩年の意義

溝本 章治

朱子の思想形成については近年においても屢々取り上げられている。その一大転機とされるのが朱子四〇歳代前半の所謂る已発未発説の定立であり、六〇歳頃には大枠では完成していた、というのが大方の見方であろう。その後はどうであろうか。

本発表では概ね六五歳以降を取り上げる。それは朱子六五歳時、侍講として行った講義の案、『経筵講義』が、この時期の思想形成の研究上、格好の資料となるからである。

近年『経筵講義』に着目した論述がいくつか発表されているが、中には(現行)『大学或問』の所説が『経筵講義』で改訂された、との立場を取るものがある。しかし、これは現行の『大学或問』が『経筵講義』後に改訂された、と見るべきであろう。なぜなら、吉原文昭『南宋學研究』(二〇〇二)が指摘するように、現行『大学或問』には『経筵講義』後に改訂されたと思われる箇所があるからである。だが、吉原氏はこれについて総括的に論じられてはいない。そこで、この改訂の思想形成における意義を考えるのが我々に残された課題の一つとなろう。

見るところ、「大学補伝」における「全体体用」の表現、『大学或問』における「敬」の特説、所以然と所当然の併言、「学をなす所以は心と理のみ」の言説などはこの時期の手になる可能性が高い。これは表現の観点から言えば、大きな成熟と言って過言なからう。のみならず、思想の観点から見ても、一つの脈略が窺える。六〇歳代に入って大きくなったと思われる自然学への関心などから、理に対する見方に広がりが見える。これに伴って心と理、認識主体と認識客体の分別が一層明確になる。これがさらに認識客体に対する思弁を深めるとともに、平衡をとるように認識主体の重視が進む、ということである。

朱子晩年は、決して付け足しではなく、飛躍的な完成期であったと言えよう。

王陽明の「龍場の大悟」は、あまりにも有名な話である。それについては、これまで無数の解釈が行なわれてきたが、そのほとんどは、錢徳洪が中心となって編纂した『陽明先生年譜』の記事を前提にしたものである。しかし近年、文献学研究的の進展などで陽明本人に関わる新資料が少なからず発見され、また資料の読み方も厳密化することができるようになったため、『年譜』記事の事実としての信憑性が、かなり疑われるようになってきた。そうしたなか、資料の精査に基づいて、「龍場の大悟」は錢徳洪が描くほど劇的なものではなく、そもそも陽明の置かれた環境もふつうに言われるほど危機的なものではなかったとする意見が出されている。そこで発表者も、この時期の文章と百数十首に上る詩作を調べてみたが、そこから見えた陽明は、生死の危機にさらされるよりも、むしろある程度友人や弟子に囲まれていた状況にあり（友人には貴州省の高官も少なくない）、彼が危惧していたのは目前の死に脅かされることではなく、むしろ永遠にこの地で過すことになることであつたように思われる。

龍場に赴く途中、そしてそこから帰る途中、陽明は同じく萍郷縣を通り、その濂溪祠で同じ脚韻を踏んだ詩を作った。赴任の際には単に周敦頤に対する憧憬の念を表わしていたのが、帰還の際にはすでに「曾て凶書に向かひて 面真を識る」（「再過濂溪祠用前韻」、『外集』一）と従来の学問の問題点をはっきり意識するようになった。その半年後、陽明は都の立派な官職に返り咲いたが、以前と同じ立場に戻った彼は、龍場での経験を通して、以前とは異なる姿勢を見せたのであろうか。またその思想的な言説や活動にも、何か新しい変化は見られるのであろうか。本発表はほぼ同じ立場にいた龍場前後の陽明を比較して、その精神的変化をあぶり出し、それによって龍場経験の内実に向つてみたい。

I-6 マニラ刊行『無極天主教真伝実録』（一五九三）の研究―同時代カトリック教理書との関連を中心として―

王 雯璐（東京大学大学院）

ヨーロッパ宣教師によって中国の明末において作成されたカトリック教理書の中で、マテオ・リッチの『天主教義』の研究蓄積は最も厚いことはいままでもない。特に、キリスト教の信仰を中国思想と融合するアプローチが評価されており、中国の経典からの引用が多いという特徴がある。ただし、近年の研究では、『天主教義』は、ヴァリニャーノの『日本のカテキズモ』やルツジェーリの『天主教実録』といったそれ以前に作成された書物の影響を受けていることが明らかにされている。『天主教義』の独自性及び同時代において作成された教理書の全体像が一層明らかとなったといえる。

十六世紀末に漢文で作成された性格の近いカトリック教理書としては、上述の『天主教義』と『天主教実録』の他、もう一つの文献が存在している。本研究の対象とする、フィリピン・マニラで出版された『無極天主教真伝実録』（一五九三年刊、以下『真伝実録』）である。本書はキリスト教の信仰の他、天文学、地理学の知識も含まれているため、科学史の研究に注目されてきた。一方、本書の第一章から第三章までのキリスト教の信仰に関する部分の研究はまだ不十分である。特に本書が同時代の他の教理書とどのような関係にあるのかについては、まだ明らかにされていない。

『真伝実録』の著者であるドミニコ会宣教師ファン・コボは手紙で、一五八四年刊行のある漢文教理書を読んだと述べている。その教理書はルツジェーリの『天主教実録』であると思われる。ただし、『天主教実録』では中国経典からの引用が極めて少ないのに対して、『真伝実録』では中国経典から多く引用されている。中でも特に『中庸』からの引用は際立つ。この点において、『真伝実録』はむしろリッチの『天主教義』に近いと思われる。本研究は、以上の問題意識から、執筆・刊行年代が『天主教実録』と『天主教義』の中間にあたる『真伝実録』が、この二つの書物といかなる関係にあるかについて究明したい。

II-1 荻生徂徠の「訳文の学」における詩文論用語について―「文理三昧」を中心に― 王侃良（名古屋大学大学院）

訓読を批判した荻生徂徠（一六六六―一七二八）の翻訳方法論についての研究は近年、語学的領域のみならず、文学、思想史学などの隣接する分野でも行われている。これらの研究においては、徂徠の「和訓（訓読）」に対する可否という問題を超え、「訳文の学（従来の和訓ではなく日常語を用て漢文を訳す）」の前提としての徂徠、あるいは当時の日本人が他者である中国語をどのように理解したか、というような議論に移されている。

このような先行研究においては、日本に帰化した中国の文人である陳元賛（一五八七―一六七二）の遺作『昇庵詩話』にある詩文論が、徂徠の「訳文の学」の形成につながるとした二つの指摘（藍弘岳（二〇〇六）『徳川前期における漢文研究と翻訳―訓読と荻生徂徠の訓読批判・翻訳方法をめぐって―』、『年報地域文化研究10』、小野泰史（二〇一七）『荻生徂徠の詩文論と陳元賛』、『昇庵詩話』、『古文辞』学の出発点として）『和漢比較文学57』が注目される。

特に小野氏は「訳文」、「華夷の岐」、「字義」、「文理」、「研究之法」、「古文辞」などの面から、陳元賛と荻生徂徠、両者の詩文論における具体的な典拠を示し、その影響関係を明らかにした。このように藍氏が提起し、小野氏が深化したものは、徂徠と関連する問題のみでなく、江戸時代における中国語、漢詩文論の研究や、本場の中国で行われていた小学（文字学・訓詁学・音韻学）、詩文論とどのように結びつくのか、というテーマに大きな示唆を与えている。

しかし徂徠の詩文論、特に「訳文筌蹄後編」の「文理三昧」における「文理」という用語の解釈、また「文理」に関して陳元賛と荻生徂徠の両者の理論における異同等の点には、未だ議論が不十分な点があり、再検討の余地がある。そのため、本発表では先行研究を踏まえながら、「文理三昧」における荻生徂徠の詩文論用語について考察を試みる。

II-2 『孫子国字解』と荻生徂徠の兵学思想

許 家晟（早稲田大学非常勤講師）

荻生徂徠（一六六六―一七二八）は江戸時代の最も著名な儒学者の一人であると同時に、兵学者でもある。彼は自ら「祖母・母ともに将種なりと私には自讃におもふもをこがましけれども、其余習家に残りて幼少より武義を好み読書の片手間には心を是に用」（『鈴録』序）いたといい、兵学を好んでいたことが分かる。彼は儒者でありながら兵学関係の著作も多くあり、そのうち最も重要なものに『孫子国字解』と『鈴録』があげられよう。また、日本における東洋兵法の聖典ともいえるべき『孫子』に対する本格的な注釈は江戸時代に入ってから盛んになったが、その中でも特に優れたものとして評価されたものとして『孫子国字解』をあげることができる。

『孫子国字解』は徂徠学の形成にも関与しているという論考はある（前田勉『近世日本の儒学と兵学』、藍弘岳『荻生徂徠の思想形成における医学と兵学―『徂徠先生医言』と『孫子国字解』を中心に』）が、著作自体に対する研究は寡聞にして知らない。従って、本発表は『孫子国字解』の内容そのものの考察を行いたい。本書は、平易な和文と数多な歴史上の事例による綿密な注釈書である一方、徂徠の思想を垣間見ることもできる。特に「兵は詭道なり」の「詭」の字に対する解釈はのちの古文辞学的方法に繋がっており、『易』の師卦を「聖人の兵法」とする彼独特な見解は、のちの『鈴録』にまで一貫したものである。さらに、ここから徂徠の経世論にも含まれた「戦略」としての思想にまで発展したのであることを検討していきたい。

II-3 佐久間象山の『喪礼私説』について―幕末における『家礼』受容の一例―

韓 淑婷（九州大学大学院）

本報告では幕末における『家礼』の受容について、幕末の思想家・佐久間象山の『喪礼私説』を取り上げて考察したい。『喪礼私説』はどのような著作であって、それまでの『家礼』受容とはいかなる違いがあり、いかなる特色を持っているのかについて検討する。また幕末の時代背景や社会状況を踏まえた上で、『喪礼私説』は象山においてどのような意味合いを持ち、当時の知識人のどのような心理状態を反映していたかについて論じたい。

具体的には、まず『喪礼私説』と『家礼』の『喪礼』とを目次構成・喪礼次第の面から比較する。象山が日本の通例や風習に合わせて『家礼』や従来の儒学伝統作法を改変・調整した点に焦点を合わせ、①『家礼』の「復」の礼と臥棺、②『礼記』の「遷尸於牀」、『家礼』の「南首」、③『家礼』の「易服不食」、「倚廬寢苦」の礼の三つの例を通して検討する。さらに、象山が武士身分のシンボルとも言える「刀」を喪礼作法の中に取り入れた点に注目し、その意義を論じる。

次に象山『喪礼私説』の特色について、①「人情」要素の導入、②洋学知識の合理性による『家礼』への批判と改良、③仏式作法に対するアンビバレントな態度の三点から検討し、象山が『喪礼私説』を作成した意義について論じたい。母の葬式を儒式で行えなかった遺憾を著作『喪礼私説』に託すという象山の心境、あわせて象山が『喪礼私説』を著述する真の意図について検討する。最後に、幕末における『家礼』受容の意義についても考えてみたい。幕末において、『家礼』は学問思想の面から注目を集めるのみならず、政治的課題にも材料を提供していたこと、そして象山に限らず、当時の知識人は喪祭に眼差しを向けて『家礼』から政治的知恵を獲得することが少なくなかったことを明らかにしたい。

II-4 新しい英雄の誕生―科学小説から見る清末中国における想像力の変容―

段 書曉（早稲田大学大学院）

清末中国において、西洋の近代科学の伝来に伴い、人々の知識体系、価値観、世界に対する想像力が大きく変化した。それは当時の小説、特に科学小説に如実に描かれている。本研究は、それら清末中国の科学小説に現れた新しい「英雄」のイメージの分析を通して、激しい社会転換期における人々の想像力の変容を、「英雄」のイメージを中心に考察する。

「英雄」は近代以前から様々な文学作品に描かれ、様々な方法で考察されてきた。「英雄」をめぐる想像力は、それが内包する「力」と「正義」の側面を中心に語られてきたと言つてよい。つまり英雄は、強大な「力」を持ち、「人間の可能性」を表象するとともに、常に他者あるいは共同体のために戦い、秩序を維持し、追求すべき「正義」を象徴するものとして描かれてきた。

中国古典文学における「英雄」の「力」と「正義」は、「文」（精神的な力）と「武」（身体的な力）、「官」（体制内の正義）と「野」（体制外の正義）の対立を座標軸に、その有無によって四種類のイメージに分けられ、「官僚」、「武将」、「隱者」、「義賊や俠客」がそれぞれを代表してきた。

しかし、近代になると、そうした枠組みに囚われない「超級英雄^{スーパーヒーロー}」ともいべき新しい英雄のイメージが現れてくる。ここでは、清末の代表的な科学小説五編を選んでその中の新英雄の特徴を整理し、最も代表的な「超級英雄^{スーパーヒーロー}」である「電学大王」のイメージを分析する。それを通して、伝統的な中国社会の「英雄」イメージにおける「文」と「武」、「官」と「野」の対立がどのように解体され、どのようにして「科学」と「国家」が新時代における「力」と「正義」として想像されるようになったか、さらに、想像力の変容において、伝統と近代がどのように接続し、衝突しているか、が明らかになるはずである。

小説家張資平は、かつて「創造社の肉」と呼ばれ、作品の量・話題性・大衆の受容において、「創造社の骨」である郭沫若及び「創造社の皮」である郁達夫と匹敵する存在であった。しかし、「多角の恋愛小説」ばかり量産すると揶揄され、更に汪精衛政府に仕えた「漢奸」というレッテルなどにより、今日に至るまで十分な研究が行われて来なかった。張資平の文学に関しては、「△」（三角恋愛小説家）という魯迅の毒舌が有名であるが、鄭伯奇が一九三五年の『新文学大系・小説三集』の「導言」に挙げた「人道主義めいた」上辺だけの「写実主義」という評価が張資平研究の出発点となった。以来、後世の研究者は主に彼の小説における恋愛と性欲・キリスト教の影響・日本の自然主義の受容・都市文学など、「新文学」史の主たる潮流を描く文脈で張資平を取り上げてきた。

本発表ではそれとは異なり、今まで注目されていなかった、一九二〇年代初頭に『学芸』に掲載された張資平の鉱物や石油に関する文章を取り上げ、その中に含まれた一見時代遅れに見える「物質文明」に対する執着が何であったのか、その本質を解明したい。次に、彼の「梅嶺の春」「苔莉」「上海のルンペン・インテリゲンチヤ」など一九二〇年代の小説の分析を通し、彼の中には、自然界の物質だけではなく、人の感情や欲望も「モノ」として取り扱おうとする視点が あることを読み解く。それにより、「モノ」に対する執着及び追求は彼の文学創作にも反映され、精神重視の旗印を掲げる五四文学のなかではある種の異端児であったことを示す。

このように文学に啓蒙や革命の重荷を託さず、ひたすら「モノ」を丹念に描いた張資平は、五四文学の高揚と衰退・革命文学の興隆といった思想性を重視する後世の新文学研究の主流から脱落することとなった。本発表では彼の独自性に注目し、新文学史の中で彼を再度位置付けること目指す。

II-6 王僧虔の位置―書論と音楽論の分析から―

関 俊史（早稲田大学大学院）

劉宋・南齊を生きた王僧虔は、王導の玄孫にあたり、太子舍人などを経て、左光祿大夫に至った。彼の代表的業績には、「誠子書（子を誡めるの書）」や「論書」（唐・張懷瓘『法書要録』所収）などがある。

従来の王僧虔の研究では、歴史学では「誠子書」を通して「貴族制」・「族門制」の問題として、あるいは清談の歴史的展開において扱われ、さらには「論書」をめぐる書論研究や音楽論（楽論）に着目した個別的研究が行われてきた。就中、書論史研究においては、永明文学と連動する書学の一場面（永明書学）として王僧虔を把握しようとする動きもある。

王僧虔は「誠子書」で四教三学をはじめとする幅広い知識、教養の獲得を提唱しているが、学術に対する王僧虔の具体的な言及は伝わらない。そこで、本発表では王僧虔が「誠子書」において述べる「兼通」を果たす過程として、具体的には現在王僧虔のものとして伝わる「論書」・「書賦」（『藝文類聚』巻七十四）あるいは「楽表」の探求を行う。特に本報告では従来の研究においてあまり取り扱われなかった「書賦」の詳細な検討を行う。なぜならば、この賦は「南史」によれば、後に子の王儉によって注と序が付されたとあり、ある一定程度影響力を有していたと考えられるためである。これらを網羅的に考察することにより、王僧虔の諸文化への横断的態度を検証し、それによりさまざまな文化的価値が乱立乱隆した、六朝中期の諸文化への士大夫の一視座を明らかにしようとするものである。なお、王僧虔がどの程度関与しているか諸説ある羊欣「古来能書人名」も、考察において援用することにする。

II-7 唐代における蔡邕書法の評価とその影響

劍持 翔伍（筑波大学大学院）

蔡邕（一三三～一九二）は後漢の政治家・儒学者である。さらに文学・音律に通じ、書も善くしたことから「文人」との評もある（丹羽允子「文人の原形―蔡邕―」、一九七三）。その業績は、自身が校訂した經典を「熹平石經」（一七五）として、自らが書丹したことが特筆されよう。そうした蔡邕の石經は、唐代においても宮中における学書の規範として用いられており（『新唐書』巻四十四志第三十四 選舉志上）、書芸術の隆盛期である唐代書法へ一定の影響を及ぼした可能性が指摘される。

実際に、蔡邕については、唐代の書法の理論（書論）にも、石經を中心とした記述が多く見られ、当時の書学への影響力が推測される。また、蔡邕の石經に影響されたと見做される作例も複数伝わっている。その一方で、唐代の作例を記録した宋代の金石著録類においても、複数の作例を蔡邕の遺品であると判断する記載が見られ、唐代から続く蔡邕への評価を伝える資料として注目される。

以上を踏まえ、本発表では唐代における蔡邕書法の評価とその影響について、以下の手順で検討する。初めに、唐代から宋代の書論および文献資料に見られた、蔡邕の遺品とされるものについて、現存する図版を収集し、共通する書法上の特徴を明らかにする。次に、唐代書論を中心とした文献資料における蔡邕に対する記述を精査し、唐代における蔡邕の評価について調査を行う。以上を総合し、蔡邕書法は唐代においてどのような評価が与えられていたのか、さらにその評価は当時の書学にどのような影響力を持っていたのかを明示したい。

以上の問題は、書法が盛んにおこなわれた唐代、特に実用的な楷書・行書・草書以外の多様な書体を用いて表現するようになった盛唐期以降の書法と密接な関係があると推察され、唐代書法史の書体選択の展開において重要な鍵を握る。これに加えて、蔡邕書法を通じて唐代書法史における転換期の存在についても私見を提示したい。

II-8 ポストン美術館所蔵岡倉天心旧蔵漢籍について

松村 茂樹（大妻女子大学）

世界有数の美術館である米国のポストン美術館は、東洋美術の殿堂とも称せられる。その東洋美術コレクションが、一九〇四年から亡くなる一九一三年まで在籍（一九一〇年からは中国・日本美術部長）した岡倉天心（一八六二～一九一三）によって整備され、充実の度を加えたことは有名である。

天心は、卓越した学識を具えていたが、漢学者というわけではなかった。だが、早年からの友人で、当時上海に住んで「中国最後の文人」たる呉昌碩（一八四四～一九二七）と深く交わった長尾雨山（一八六四～一九四二）を同美術館鑑査委員に迎え、教示を請うなどして、漢学の造詣を深めるよう務めている。

発表者は、二〇一五年四月より一年間、ポストン大学客員研究員としてポストンに滞在し、ポストン美術館で天心及び雨山の中国関連事業に関する資料調査をする機会に恵まれた。そして、中国・日本美術部の図書室で、当時購入された関係漢籍類五十二件を調査し、「ポストン美術館中国・日本美術部図書室所蔵漢籍目録抄」を作成して、その中に天心の題簽と蔵印がある旧蔵漢籍二十五件、天心の書き入れまたは題簽がある漢籍五件が含まれていることを確認した。また、これらの漢籍の中には、呉昌碩が社長を務めていた印学研究団体・西泠印社刊行のものがあり、呉昌碩の紹介で同社社友となっていた雨山が送った可能性が高い。

本発表では、これら岡倉天心旧蔵漢籍を中心とするポストン美術館所蔵漢籍を紹介し、その分析を行いたい。このことにより、ポストン美術館を東洋美術の殿堂たらしめた天心の漢学造詣の本質を明らかにできると思われる。

II-9 中国書画碑帖の日本流入に関する一考察―収蔵家・菊池惺堂を起点として―

下田 章平（相模女子大学）

発表者は日中の書道史を研究の対象とし、特に近代日中書画碑帖収蔵史について検討を重ねてきた。この分野はこれまであまり研究がなされてこなかったが、国際シンポジウム「関西中国書画コレクションの過去と未来」（京都泉屋博古館、二〇二二）などが開催され、近年ようやく着目されるようになってきた。発表者は目下近代において重要な収蔵家の活動を検討しつつ、収蔵家間のネットワークや「賞鑑家」「収蔵家」「業者」からなる「収蔵集団」の検討を行い、近代日中書画碑帖収蔵史の構築に向けて取り組んでおり、本発表もその一環として行うものである。

本発表では大正から昭和にかけて活動した、関東を基盤とする大収蔵家である菊池惺堂（一八六七―一九三五）を起点として、中国書画碑帖の日本流入について検討してみたい。惺堂は蘇軾「黄州寒食詩卷」（國立故宮博物院蔵）、伝李公麟「瀟湘臥遊図卷」（国宝、東京国立博物館蔵）、渡辺崋山「于公高門図」（重要文化財、個人蔵）、「定武本蘭亭序」（木雞室蔵）といった優品を収蔵し、近代日中収蔵史上においても極めて重要な人物である。

惺堂の書画碑帖収蔵の実態については、第二回中国近現代文化研究大会（於大妻女子大学、二〇二三）ですでに検討を行っている。本発表ではこれを踏まえた上で、まずは惺堂の交友関係や彼を中心とした収蔵ネットワークについて検討したい。つづいて、惺堂は関東・関西両方の収蔵集団に所属していたと見られる収蔵史上重要な人物であると考えられるため、彼の個人的な収蔵ネットワークと、関西・関東の収蔵集団の関わりについて検討することで、これまで解明されてこなかった、両収蔵集団の特徴や関係性、その形成及び変遷についても把握できると考えている。こうした検討により、日本が中国より流出した中国書画碑帖の一大集積地となった要因の解明の進展に寄与することが期待される。

II-10 平田篤胤の易学

廖 海華（北海道大学大学院）

朱子の易学では、現存の『周易』の卦爻辞を「後天易」と見なして、それより古いものとして、根本原理を含む「先天易」の存在を主張した。その主張の上で、河図洛書・先天八卦など「先天易」の構成要素を考究し、その体系を組み立てた。ただ、朱子にとつては、この二系統の易は併存して、ともに尊崇されるべきものである。

江戸時代の易学において、朱子のこのような見解に対する批判が現れてきた。例えば、伊藤東涯などの学者は、儒教経典の「古義」を回復する立場から、朱子の所謂「先天易」（伏義易）を批判して、現存『周易』の唯一性・正統性を力説した。それに対して、もう一方の極端な立場は国学者の平田篤胤に見える。彼は「文王易」（主に『周易』卦爻辞）を強く批判し、「伏義易」だけを尊崇し、さらに「伏義易」の全貌を復元しようとした。

この復元の動機として、篤胤が「伏義」を「大國主命」と見なすという独断的な古史観の存在が指摘されている。しかし、その復元作業の内部構造は、様々な学術的な営為からなり、決して単なる狂信ではない。そして、本発表は、篤胤の易著作（『太昊古易傳』『三易由来記』など）を通して、彼がどのように「伏義易」を復元するか、という問題を易学史の流れの中に探求してみたい。

朱子とその後継者たちの見解、及び「伏義易」に対して伊藤東涯・紀曉嵐など当時の学者が行う批判を、篤胤は相当詳しく承知した上で、それぞれの意見を補足したり反論したりして、さらに自分の意見を出したのである。それ故、篤胤の易学を、易学史に正確に位置付けてこそ始めて、その特殊性を十分に理解できるのである。

篤胤の易著作は、蕪雜ともいえるほど様々な分野の知識を利用している。しかし、その構造を考察してみると、そのような多岐に亘る知識は、ある術数学的な「原理」によって選択され、その上で理想的な「伏義易」の中に統合されていることが分かる。

II-11 安井息軒「辨妄」の忠孝観念とその近代的意義―井上毅、井上哲次郎との共通点― 青山 大介（湖南大学）

安井息軒（一七九九―一八七六）は幕末から明治初期にかけての儒宗である。彼の三計塾は、明治新政府で活躍した人材を数多く輩出しており、「教育勅語」の起草者として知られる井上毅も、またその一人である。

さて明治六年（一八七三）二月二十四日、明治政府は外交上の理由から基督教禁令を撤廃した。同年同月から四月にかけて、安井息軒は「辨妄」五篇を『教義新聞』誌上に発表して基督教批判を展開、解禁政策に強く反対した。同篇は同年のうちに「鬼神論（上）」と「與某生論共和政治書」を合して『辨妄』一卷として出版され、同書に序文を寄せた島津久光の要望で年末には和訳本まで出版された。基督教徒の山路愛山は、同篇が一般の若者を基督教から未然に遠ざけたことを認める。

本報告は、まず「辨妄」の忠孝観念を分析し、その歴史主義的傾向を明らかにする。すなわち息軒は忠孝を「天理」などの形而上概念で根拠付けるのではなく、日本人が長い歴史のなかで培ってきた倫理観念だとする。次に、それより派生する功利主義的宗教観を明らかにする。すなわち息軒は、基督教の教義は日本の伝統習俗と相反すること甚だしく、既存の社会秩序を破壊する方向へ働くため解禁は不可だとする一方で、仏教に対しては、教義の上では基督教と大差ないものの、すでに日本社会に根付いているという理由から擁護する。最後に、これらが井上毅や井上哲次郎の考え方に相通することを指摘する。なお井上毅の基督教批判と「辨妄」に共通点があることは、ヨゼフ・ピタウがすでに示唆している。また井上哲次郎は『教育と宗教の衝突』で「辨妄（二）」を引用している。

安井息軒が著した漢籍注釈書は江戸漢学の終着駅であると同時に、明治中国哲学の始発駅でもあった。そして彼の「辨妄」もまた、江戸儒者による基督教批判という反動の一種であるのみならず、明治倫理学の先駆者という思想的意義を持つのだといえよう。

第三会場

III-1 『守先閣蔵書志』と陸心源の蔵書目録編纂について

劉 斯倫（慶應義塾大学大学院）

陸心源 字は剛父、号は存齋、清末の浙江歸安の人。陸氏は蔵書に富み「皕宋楼」を有し、聊城の楊氏・昭文の瞿氏・錢塘の丁氏と並び「海内四大蔵書家」と称された。彼は伝統的な蔵書家・校勘学者とされる人物であるが、死後、子孫は蔵書を保持することができず、光緒三十三年（一九〇七）年に至り、銀元十萬兩でその蔵書は三菱財閥の岩崎氏に譲られることとなった。この事は当時中国の学界に非常に大きな衝撃を与え、その余波は今に至っても絶えていないと言えよう。

陸心源の蔵書目録の中で、唯一の自ら刊行したものとされる『皕宋楼蔵書志』（一八八二）は、最も著名であるが、明治末期の書誌学者・島田翰の『皕宋楼蔵書原流考』によれば、編纂当初、この書名は存在しておらず、「守先閣蔵書志」と題付けられていたという。『守先閣蔵書志』は島田翰の記録以外には資料が殆ど見当たらず、その詳細も不明であるが、意外にもまだ世に遺り、曲折を経て現在は国立国会図書館所蔵となっている。

『守先閣蔵書志』はなぜ『皕宋楼蔵書志』に改名されたのか、この二書は如何なる関係にあるか。本発表の目的は、これらの問題を含め『守先閣蔵書志』の性質を分析した上で、陸心源の目録編纂をめぐる次の三つの問題を検討、説明することである。

第一は、『皕宋楼蔵書志』の編纂者に関する問題。従来の李宗蓮による代筆説と、近年説かれている陸心源本人が著したとする説を、『守先閣蔵書志』に見える編集の痕跡をもとに再考察する。

第二は、陸心源の三大蔵書楼の成立時期。『守先閣蔵書志』と『皕宋楼蔵書志』との関係を検討することで、未だ不明点の多い陸氏の三つの蔵書楼成立の前後関係解明を試みたい。

第三は、陸氏による張金吾『愛日精廬蔵書志』の利用である。蔵書目録の編纂にあたり、陸氏は如何なる方針のもとで、どこまで張金吾の『愛日精廬蔵書志』を参照したのか明らかにしたい。

III-2 漢魏六朝時代における騷體賦の変貌―本文生成と文体選択の二重視座から―

林 暁光（九州大学）

漢魏六朝時代における賦は、一般的には漢賦と六朝賦という二段階に分けられ、漢は散体の大賦、あるいは辭賦の時代、六朝は文体賦や駢賦に変化した時代とされる。だが、漢代から六朝まで「楚辭」系、つまり騷體賦の流れは続いていた。大賦を除けば、漢魏六朝期の賦は『楚辭』から生じたものといっても過言ではないだろう。この文体的な視座から見ると、時期の区分はいささか異なってくる。むしろ漢代から東晋までが伝統を守った第一時期、南朝時代が独自の展開が見られるようになった第二期と看做すことができるのである。

漢晋時代、ことに漢末以降の賦は、現存する個々の作品によって見れば、多岐にわたる様相を現していることから、往々にして、新しいスタイルが創造された時期であると看做されてきた。しかし、これは、作品本文を誤読したが所以であると考えられる。この時期の詩文は唐宋時代の類書によって保存されるものが多く、それら類書に収録されたのは作品の全体ではなく、任意に削除が加えられた一部分であったので、騷體賦の標識となる「兮」という字も、しばしば同時に削除されたのである。改めてこの本文の虚像を見直せば、漢晋時代における騷體賦の割合は大幅に増え、しかも「離騷」系、つまり六言対句の前の句の末に「兮」字を置く句式はなお一つの主流というべき文体的特徴であったことが見えてくる。

そして南朝に入ると、初めて著しい変化が生じる。宋の江淹・鮑照を代表として、その賦作の中に「九歌」系、つまり一句の半ばに「兮」字を置く句式が数多く見られるようになる。この時代は「九歌」への興味が再び喚起される時代ともいえよう。梁の蕭綱・蕭繹兄弟もこの方向をさらに進め、多彩な賦句を作り出した。同時に、詩的五言七言の句も賦に用いられた。漢晋時代の賦の作者達が『離騷』の伝統を忠実に守った上で、南朝時代の作者達が、文体力を発揮し、表現力豊かな新しいスタイルを創造したものと考えられる。

III-3 蕭衍父子の樂府詩と齊梁の文學

李 嬰宇（東京大学大学院）

南齊永明時代、蕭子良は雞籠山に西邸を建て、文學サロンを開いた。そこには文學の士が多数集まり、文學の行事や詩文の交流を盛んに行ったが、後に梁の武帝となった蕭衍もそのうちの一人であった。蕭衍やその息子である蕭綱・蕭繹は、文學に優れた臣を任用し、自らも詩文を作った。彼らの詩には蕭子良の文學サロンからの影響が見られる。すなわち、蕭衍は永明文學と梁の文學とをつなぐ役割を果たしているのである。

蕭子良は西邸において樂府詩の制作を指揮しており、現存する作品としては、たとえば「芳樹」、「有所思」、「臨高臺」などの樂府詩がある。梁になると、これらと同じ題を持つ樂府詩が、蕭綱・蕭繹や彼らに仕える文臣によって作られるようになる。彼らはこのように同一の題を用いるだけでなく、蕭子良の文學集団において用いられた詩の表現をも継承している。

一方で蕭衍父子の樂府詩には、独創的な面も見受けられる。たとえば彼らはあまり文人に顧みられることのないなかつた吳歌西曲を模擬して樂府を創作し、さらに新たな樂府題をも作り出した。彼らの作った樂府題は樂府の世界を極めて豊かにし、その後、唐に至るまで、これらに合わせて樂府詩が作られ続け、唐詩の重要な一部分となった。また言語表現の面でも、彼らは口語的語彙や新たな語彙を大胆に詩に詠み込んだ。帝王である彼らが文人とこうした作品を唱和したことにより、上述のような新たな変化が広く浸透し、唐詩に影響を及ぼすまでに至ったのである。

本発表では文學史の視点から、蕭衍父子が創作した樂府詩を主な題材として、蕭子良から蕭衍を経て蕭綱・蕭繹へと継承された影響と、彼らの詩作がもたらした変革について考察したい。

III-4 寿蘇会・赤壁会と富岡鉄斎が描く蘇東坡

戦 曉梅（東京工業大学）

富岡鉄斎（一八三七～一九二四）は、「文人画最後の巨匠」と呼ばれ、幕末、明治、大正を生きた多産の文人画家である。その作品の画題は中国の古典文学や人物の逸話から由来するものが多く、なかでも、北宋の文豪蘇東坡（蘇軾、一〇三七～一一〇一）に因んだ作品が多い。これは富岡鉄斎が生涯蘇東坡の自由逸脱な人物を敬慕し、自らも蘇東坡と同じ日の生まれであったことに深い縁を感じたからであることは言うまでもない。しかし、その藝術の完熟期と呼ばれる二十世紀十年代～二十年代の間に、鉄斎は蘇東坡を主題とする大作を次々と創作し、大正十一年（一九二二）に「百東坡展」と呼ばれた「富岡鉄斎南宗画粹展観」を開いたこと、画集『百東坡図』を出版したことから、この時期の鉄斎は、蘇東坡関係の作品を創作することに対して、それまでない高い創作意欲を示したことが伺える。富岡鉄斎は、どうしてこの時期に蘇東坡の題材にこれほど高い関心を持つことができたのか、そして鉄斎藝術の最高水準を代表する作品の数々を生むことができたのか。本発表では、このことを鉄斎が積極的に参加していた「寿蘇会」「赤壁会」とのかかわりのなかで考えてみたい。

「寿蘇会」「赤壁会」とは、大正年間、京都で教度にわたって行われた、蘇東坡を記念する文人の集いで、それを主宰した中心人物は鉄斎と同様に蘇東坡を敬慕した在野の文人、漢詩人・長尾雨山（一八六四～一九四二）である。蘇東坡の誕生日を祝う「寿蘇会」は計四回開かれ、大正五年（一九一六）の乙卯寿蘇会、翌六年の丙辰寿蘇会は富岡鉄斎の息子・謙藏と長尾雨山の共同主宰のもとで行われたが、その後大正七年の丁巳寿蘇会、大正九年の己未寿蘇会とともに長尾雨山が独自で主宰した。富岡鉄斎は数回の寿蘇会に自分の所蔵を提供したり、創作したり、積極的に協力した。さらに大正十一年に長尾雨山が蘇東坡の名作「前赤壁賦」「後赤壁賦」を記念して、宇治川で「赤壁会」を開くことになり、富岡鉄斎は発起人の一人となり、赤壁会に大いに貢献した。

本発表では、「寿蘇会」「赤壁会」と富岡鉄斎の描いた蘇東坡題材の作品に着目し、その具体的な関連性を紐解きながら、富岡鉄斎の晩年藝術の大成において、寿蘇会・赤壁会が果たした役割について考えたい。

III-5 『新編酔翁談録』考―「酔翁」および編者の問題を中心として―

孟 夏（広島大学大学院）

『新編酔翁談録』（以下「酔翁談録」とする）は宋末元初の頃に編纂されたとされる小説集である。『酔翁談録』所収の物語の中には、前代あるいは同時代の他の書物に収められる物語と同じもの、もしくは類似するものも多く、また後世の作品の中には『酔翁談録』以外にも現存する類話が見られないものもあるなど、小説史の展開を考える上でも大きな意味を持ちうる作品である。

しかし『酔翁談録』については不明な点が多い。例えばその巻首には「廬陵羅燁編」と題されているが、羅燁がどのような人物なのかはよくわからない。従来の研究においては、甲集の「舌耕序引」に講釈師に関する情報が記載されていることから、編者羅燁は「書会才人（講釈師の底本を作る人）」であり、『酔翁談録』は語り物と深い関係のある書物、あるいは「講釈師の底本」だとされてきた。一方で、『酔翁談録』所収の話には、語り物と関係があるとは思えない詩詞も見られる等、『酔翁談録』が講釈師の底本だとすると理解しがたい問題も存在する。そこで発表者は、『新編酔翁談録』という書名、そして「廬陵羅燁編」という情報に考察を加えることで、『酔翁談録』の性質や成立について考えてみたい。

これまでに「談録」について考察を行ったところ、「談録」と名付けられる書物は、ある人物によって談論された逸聞や瑣事などが、文人によって記録、編纂されたものであるという共通点を持つことがわかった。『酔翁談録』もこうした「談録」群の一つとして考えるべきであろう。

では、『酔翁談録』の「酔翁」とはいかなる人物だろうか、さらに編者である羅燁とはどのような人物なのだろうか。本発表では、『酔翁』および廬陵羅氏の情報などを整理して考察することによって、『酔翁談録』の性質を明らかにしたい。

『琵琶記』は万暦年間に最も多く出版された。黄仕忠氏の研究によれば、現存する明刊本『琵琶記』のすべては万暦二十五年玩虎軒刊本の影響を受け、継志齋刊本・集義堂刊本もそこに含まれる。黄氏は継志齋刊本の「凡例」および「齣目」の襲用関係、集義堂刊本巻首の「琵琶記序」から、両者が玩虎軒刊本の裔本であると推定する。しかしながら、この結論は、本文、眉批を対校して得られたものではなく、また『琵琶記』諸版本における継志齋刊本・集義堂刊本の位置づけを明らかにしたうえで導かれたものでもないため、にわかには信を措きがたい。

国立公文書館内閣文庫蔵『重校琵琶記』は、嘉靖三十七年河間長君序刊本に基づき、万暦二十六年継志齋堂主陳大来によって出版されたものであり、『琵琶記』の原初的な内容を残していると考えられる。名古屋市蓬左文庫蔵『重校琵琶記』は集義堂から出版されたが、刊刻年代、編者は不明である。この両者の版式、挿図には著しい差異が認められ、集義堂刊本にのみ各齣末に「釈義」、「音釈」が附されている。その一方で、両者の本文は近似しており、同一底本に基づいて校勘、出版されたことは明らかである。

本発表では、明刊本『琵琶記』の本文および眉批と対校、分類し、上述した『重校琵琶記』両種の底本は黄氏の所説のごとく玩虎軒刊本ではなく、中国国家図書館蔵『新刻重訂出像附釈標註琵琶記』(戴君賜註釈、唐晟校梓)であることを明らかにしたい。また、従来、通行本系統を代表すると看做されてきた汲古閣刊本は、実は玩虎軒刊本からではなく上述の唐晟校梓本から多くを襲用しており、通行本系統に属するとされる刊本について再度精査する必要があることにも言及したい。すなわち、現存する明刊本『琵琶記』のなかで唐晟校梓本の位置づけを知るうえで、『重校琵琶記』は極めて重要な位置を占めているのである。

III-7 『風俗女西遊記』に見る『西遊記』の影響

蕭 涵珍 (中興大学)

中国四大奇書の一つ『西遊記』の刊本が日本に舶来したのは江戸初期以降のことである。その後、江戸中期に入ると、『通俗西遊記』が宝暦八年(一七五八)から、『絵本西遊記』が文化三年(一八〇六)から刊行され始めたように、一連の翻訳が出現し、江戸の読者の間に三蔵法師と個性的な弟子たちの西天取経の物語が広く浸透していった。こうした背景の下、人形浄瑠璃『五天竺』(一八一六)、曲亭馬琴『金毘羅船利生纜』(一八二五)、一八三二)、楚満人『風俗女西遊記』(一八二九)のように、『西遊記』の枠組みを踏襲しつつ、和漢の典故や技法を巧妙に駆使して新たな生命力を吹き込んだ翻案・関連作品が次々に登場した。

本発表では、これまで詳細な分析がなかった『風俗女西遊記』に着目し、『西遊記』との比較研究を行う。『風俗女西遊記』は、清見義景家のお家騒動を巡り、三蔵法師にあたる三ツ姫が、高子(孫悟空)やおさこ(沙悟淨)、おいの(猪八戒)を引き連れ、家の再興を目指す話である。楚満人は『西遊記』の舞台を鎌倉時代に移し、主要人物を女性に変えることで、この作品を魅力的なものに仕上げている。そこで本発表では、『風俗女西遊記』の人物設定に残る『西遊記』の痕跡や、その性別転換の創作意図について考察を試みる。

まず、高子とおさこの人物像を、二人の生い立ちや両親の出自、画像の描き方などを分析しながら、『西遊記』のそれと比較する。高子の母・木の葉が住む赤岩庚申山の風景や、おさこが河童に遭遇する場面に、花果山の水簾洞や如来の五行山からの影響が窺えることは、その一例である。次に、『風俗女西遊記』を、『水滸伝』の好漢を女性にした曲亭馬琴『傾城水滸伝』(一八二五)一八三五)と併せて考察することで、性別転換を図ったこれらの作品群が、当時のいかなる背景の下どのような読者層に狙いを向け作られたものだったのかを明らかにしていく。これにより『風俗女西遊記』の特徴を示し、本作の文学的・歴史的な価値を指摘してみたい。

Ⅲ-8 李嶠「宝剑篇」創作考―昇仙太子劍の手がかりとして―

種村 由季子（九州大学専門研究員）

李嶠（六四五―七一四）は、「文章の宿老」（『新唐書』本伝）として武則天の治世を支えた文人である。だがその人物像は「性榮遷を好むも、人の昇進を憎む。性文学を好むも、人の才華を憎む。性貪濁なるも、人の賂を受くるを憎む」（『唐詩紀事』卷十）など批判的なものが多い。

さて、李嶠「宝剑篇」は、宝剑の美しさやその靈妙な力を讃えつつ、天下の泰平を賛美した作品で、その内容から従来、李嶠が自らを宝剑に仮託し、重用を願う所謂「懷才不遇」の詩と考えられてきた。また武則天に対する阿諛追従と解釈されることもあるが、これは上述の李嶠の強欲な人物像に加え、当時の宮廷詩人たちが「皆狎猥佻佻にして、君臣の礼法を忘れ、惟だ文章を以て幸を取るのみ」（『新唐書』李適伝）と軽蔑的な評価を受けていることも無関係ではないだろう。

ところで「宝剑篇」では、宝剑の持ち主として英雄や遊侠だけでなく、嵩山で登仙したとされる周の靈王の太子、王子喬が登場する。実は武則天は晩年、この王子喬を昇仙太子と改名し、特に熱心に信仰した。また嵩山にある彼の古塚を新たに昇仙太子廟と命名し、大規模な修復を行ったのだが、この時、廟の石室から一振りの劍が発見されているのである。この事は、聖曆二年（六九九）二月、完成した昇仙太子廟に行幸した武則天が自ら書した「昇仙太子碑」の中でも、王子喬の劍が見つかった瑞祥として記される。

本発表では、「宝剑篇」を改めて精読した上で、併せて同時代の詩文にも着目し、この作品の創作意図について再検討を試みたい。また、武則天朝の宮廷詩人に対する批判的、軽蔑的な伝記や逸話が、彼らの作品理解に少なくない影響を及ぼしている現状についても言及したい。

Ⅲ-9 温庭筠の望郷詩について―水辺の夢―

鈴木 政光（東北大学大学院）

温庭筠（八〇―八六六）は、宋代に盛行をみる「詞」の開拓者として名を知られると同時に、晩唐前期を代表する詩人の一人である。「商山早行」は、頷聯が歐陽脩の『六一詩話』にて梅堯臣の言として、「則ち道路の辛苦、羈愁旅思、豈に言外に見われざらんや」と評価されて以来、温庭筠の近体詩における代表作とみなされてきた。

晨起動征鐸、客行悲故郷 晨起征鐸を動かし、客行故郷を悲しむ

雞聲茅店月、人迹板橋霜 鷄聲茅店の月、人迹板橋の霜

樹葉落山路、枳花明驛牆 樹葉山路に落ち、枳花驛牆に明らかなり

因思杜陵夢、鳧雁滿廻塘 因りて思う杜陵の夢、鳧雁廻塘に満つ

横山伊勢雄氏は、唐代の早行詩が、発想と用語の点で先行作品と繋がることを指摘する。「商山早行」も例外ではない。しかし、頷聯から尾聯への接続にみられる、「羈愁旅思」の情景から懐かしい「杜陵の夢」へ戻ろうとする退行的な意識が、唐代早行詩において異質であることは指摘されていない。「夢」の語を含む温庭筠の作は、『全唐詩』に収める詩三百三十五首のうち四十首、『花間集』に収める詞六十六首のうち十三首に上るが、望郷詩においても例外ではなく、温庭筠の故郷は多くの場合、夢とともに詠われ、その情景は「鳧雁」のような水鳥の浮かぶ長閑な水辺として表現される。

温庭筠の故郷について、出生地が江南の呉中であることは、陳尚君氏をはじめとする研究者によって考証されている。別墅が長安西南郊外の鄠県と東南郊外の杜城の間にあったことも、彼自身の詩から確認できる。「商山早行」では、別墅に近い「杜陵」の景物が、江南を髣髴とさせる水景として描かれている。このことは何を意味するのだろうか。本発表では、温庭筠の望郷詩にあらわれる「夢」とそこで描かれる「水辺」に着目することで、彼の望郷詩がもつ特徴について考察し、温庭筠詩詞に多用される「夢」の語が作中でのようにはたらいっているか、その糸口を探ることを目的とした。

III-10 言語に対する欧陽脩の信と不信―慶曆期における詩風と文風の違いを中心に―

渡部 雄之（広島大学大学院）

『易』繫辭伝の「書不尽言、言不尽意」に基づく中国の伝統的言語観は、中唐の韓愈を中心とする一派の文学、殊にその詩歌創作において、大きな変化を見せる。彼らは、ことばは世界の真相や主体者の思考、情感を、詳細かつ正確に言い尽くすことができると信じ、それを怪奇な文字や語句を駆使しつつ実践しようとした。後に北宋の文人たちは、韓愈等のこの新たな言語観を継承したとされる。

北宋の欧陽脩の文学は、平明暢達を尊ぶものとして論じられることが多いが、慶曆を中心とする一時期には、詩においてのみ韓愈のような「奇險」「怪巧」な作風を追求した。文では平易を主張しながらも、詩では怪奇を志向するこのような創作姿勢は、矛盾をはらむものとして呂肖奐氏により論じられている（「欧陽修对奇險風格的矛盾態度」、『西南民族大学学报』二〇〇五年第十一期）が、上に述べた言、意、物三者の関係についての考え方も、詩文間に差異が見られる。すなわち、詩ではことばにより世界のあらゆる事柄を描写し尽くすことができると信じて創作が行われたのに対し、文では物事の細部までは表現し得ないという考えの下で作品が作られたのである。かような相異は、詩と文が本来有する書き方の違いによって生じたとも言えるが、北宋人の韓愈文学の受容の仕方とも大きな関係があると思われる。

本発表では、欧陽脩において詩風と文風が異なる慶曆期の作品を中心に、韓愈文学の受容という視点から、「言不尽意」と「言尽意」の二つの言語観について論じる。同時に、かかる相異が北宋文学史の中で有する意味についても、若干の私見を述べてみたい。

III-11 黄遵憲の詩作における『日本雑事詩』改訂の位置づけ

趙 偵宇（京都大学大学院）

光緒十七年（一八九一）六月、黄遵憲は『人境廬詩草』自序で「詩の外に事有り、詩の中に人有り」と主張した。その前年光緒十六年七月、黄遵憲は光緒五年（一八七九）に東京で編んだ『日本雑事詩』初版（百五十四首）をロンドンで改訂し、定本（二百首）を完成させた。この初版がまさに「詩の外に事有り」の実践だったのに対して、定本には「懐として憶う 兒童逃学の時」、「故郷正に作す 消寒の会」といった、作者の思いが伺える詩句が増え、「詩の中に人有り」によりふさわしい。従来は、『日本雑事詩』のみを独立させた研究が主流であり、『人境廬詩草』とあわせた考察は必ずしも多くない。本発表では、黄遵憲の詩作全体の中に、『日本雑事詩』初版と定本の改訂過程を位置づけてみたい。

もともと長編の古体詩を得意としていた黄遵憲は、日本滞在中、「不忍池晚遊詩」（十五首）、「近世愛国志士歌」（十四首）など絶句連作に挑戦し始めた。「余は素より能く絶句を為らず」（『日本雑事詩』初版）と言いながらも、あえて百五十四首の絶句連作として『日本雑事詩』初版をまとめたことは、一種の創作上の実験として評価できる。そして初版から十年を経た定本に至って、「余は素より能く絶句を為らず」の語が削除されたのは、黄遵憲が実験を終えたことを暗示するのではないか。以後も、黄遵憲には、外国の任地において絶句連作として「雑感」「雑詩」を作る傾向が見られる。

さらに『日本雑事詩』の改訂内容からは、日本・欧米諸国で外交官を歴任するうちに見聞を広めた黄遵憲の、中国の「旧学」及び西洋の「新学」に対する態度の変容の軌跡も見いだせる。『日本雑事詩』初版・定本の対照から明らかになった差異について、本発表では具体的に指摘したい。

IV-1 小説『水滸伝』と明代伝奇『水滸記』における閻婆惜

呉 雨形（京都大学大学院）

宋江等を主人公とする梁山泊の物語は、元代にすでに雜劇の題材として扱われていたが、明代には、『宝剑記』、『義侠記』、『水滸記』をはじめとする多くの戯曲作品が続々と生み出された。『宣和遺事』でわずか数行しかない宋江と閻婆惜の物語は、『水滸伝』では何千字にも上る重要な回となっている。更に、明代万暦年間の許自昌の戯曲『水滸記』は、宋江と閻婆惜の物語を作品全体を支える二本柱の一本として扱っている。本文では、小説『水滸伝』と戯曲『水滸記』を比較し、テキストを中心にそれぞれの閻婆惜像を分析し、その創作動機と主旨を探索してゆく。

小説『水滸伝』では、「淫婦」である閻婆惜が欲望に駆られ、ついに宋江に殺されるという教訓を通して、全書にわたって見られる女性や色欲に否定的な思想が強調されている。それと比べて、戯曲『水滸記』は、小説では描写の少ない閻婆惜の情夫である張三郎（張文遠）に脚光をあて、二人が知り合う時期を閻が宋江と知り合うよりも前に設定することによって、ある程度二人の関係の罪悪性を軽減している。その上、美しい歌詞によって閻婆惜の淋しさを繊細に描写し、人としての欲望を肯定し同情を寄せる。一方で、小説には登場しない宋江の妻、孟氏の忠貞を強調して、閻婆惜を側面から批判している。そして小説と比べて最も大きな違いは、「冥感」の一幕（「活捉」、また「情勾」とも呼ばれる）で、死んだ閻婆惜を幽霊として登場させ、張文遠をあの手へ連れ去るエピソードを加えた点である。これは二人の愛情があの手で成就する、というよりも、自らの過ちで命を落とした閻婆惜の悔しさを表現し、更に軽薄な張文遠にもこうした「愛情」という形式で罰を下し、閻婆惜にたいする憐れみと同時に、二人の関係に批判的な態度を示したと考える。

IV-2 諏訪市博物館蔵『忠義水滸全伝』について―江戸時代の白話受容と水滸伝版本流伝―

中原 理恵（京都大学大学院）

よく知られているように、水滸伝には数多くの版本が存在し、百二十回本には、所謂「袁無涯本」、「忠義水滸全伝」、「忠義水滸全書」の3種が存在する。発表者が『忠義水滸全伝』（以下、全伝）の版本流伝について原本調査を行っていたところ、諏訪市博物館において、他の『全伝』には確認できない特徴のある写本を目にする機会を得た。

諏訪市博物館に蔵される『全伝』（以下、諏訪本の特色は、『全伝』の前段階にあたる北京大学図書館蔵「袁無涯本」のみに見られる「忠義水滸全伝序」と「宋鑑」が存在することである。この二項目は、日本に現存する六部の『全伝』には見られないことから、かつて日本に、中国の孤本とされる「袁無涯本」が存在した可能性がうかがえる。発表では、「袁無涯本」と『全伝』の関係を踏まえながら、諏訪本が「袁無涯本」と『全伝』の過渡期にあたる蓋然性、及び、「読忠義水滸全伝序」と「宋鑑」が『全伝』の段階で削られた理由を分析する。

この諏訪本の書誌的特徴については、写本ではあるが、図や字体までまるで版本を敷き写したかのように書写され、上象鼻に「水滸全伝」と印刷した特製の用紙を用いており、大がかりな作業であったことが推測される。諏訪本がそれほどまでに『全伝』をそっくりりに写し取った意味を検証する。

諏訪本の旧蔵者である高島藩第五代藩主・諏訪忠林（一七〇三〜一七七〇）は、服部南郭をはじめとした荻生徂徠派の文人たちと交流のあったことが知られている。また、諏訪市博物館には、諏訪忠林自ら白話語彙の辞書を編纂し、白話を学習しようとしていた資料が残されていることから、諏訪忠林と荻生徂徠派の文人・学者たちとの交友関係を探りつつ、諏訪本の底本、及び、江戸時代において白話がいかに受容されたかについて検証したい。

IV-3 九天玄女授天書考―『水滸伝』からの考察―

頼 思好（東京大学大学院）

『水滸伝』をはじめとする複数の明代小説には九天玄女が登場し、広く受け入れられているが、この女仙に対するイメージとして最も印象的なのは、「天から降り、天書を授ける」ということであろう。このような九天玄女像の雛形は『宣和遺事』から来ているが、それは宋朝の皇室の泰山封禪等に関係があると言われている。しかし、こうした話がとりあげられた背景としては、真宗らの封禪よりも、これ以前に太祖とともに征戦を行い参謀となつた趙普が九天玄女の逸話を引き合いに出した事柄こそが、注意されるべきではないかと考えられる。

上記の事柄は、『秘蔵通玄変化六陰洞微通甲真経』に収録された「宋尚書右僕射趙普進経表」によって窺い知ることができる。趙普は陳橋の変を主導した等の理由により北宋建国の功臣と言われる人物であり、彼がこのような進経表を書いたからには、太祖が全くこうした考え方を持っていなかったということは考えにくい。更に、征戦を行った功臣である王全斌や崔彦迪（進）、劉光義、曹彬等も趙普が通甲法を用いたことを知っていた。また、唐の皇室において既に九天玄女のこうした逸話が用いられている伝統があるが、宋の真宗期の『雲笈七籤』等からは、明らかに九天玄女の地位が上昇していることを読み取ることができる。

九天玄女について最も早く記述した文献は河図・洛書関係の緯書であるが、道教がこれを取り込んで再編成を行ったことが見て取れる。その流れの中において、九天玄女が天書を授ける逸話の起源を遡りつつ、この逸話の由来・意味を明らかにしたい。更に、こうした九天玄女の記述と『水滸伝』における記述とを合わせて考察することも試みたい。

IV-4 次世代シンポジウム いま『文選』を読む―中国古典文学の規範とその距離―

○佐藤 大志（広島大学）

陳 獅（広島大学）

中木 愛（龍谷大学）

川島 優子（広島大学）

高西 成介（高知県立大学）

テキストの電子化が進み、かつては見ることにすら難しかった資料を、いとも簡単に見ることができるようになり、またさまざまなデータベースが構築され、それらにアクセスすれば、大量の用例を瞬時に検索することが可能になった。そのような現在、だからこそむしろ、それら大量のデータと格闘しつつ、その「核」となるものとは何かを、改めて問い直す作業を試みることも、いま必要なのではないだろうか。

古典文学、ことに中国の古典文学は、文学の因襲のなかでおのずと定められた規範が強く支配するとされる。では、彼らが「規範」としたものの、彼らの文学の「核」となるものとは、どのようなものであったのだろうか。そのような中国古典文学の「規範」を探ると同時に、その「規範」と個々の文学事象との距離をはかることによって、そこに中国の古典文学を問い直し、新たな問題領域を切り拓く可能性も見えてくるのではなからうか。

今回は、その一つの事例として、六朝期の詞華集『文選』とその李善注に着目し、『文選』と各時代（唐宋から明清）、各領域（詩文・説話・白話小説）の文学事象との関係を問い直すことで見えてくる問題について考えてみたい。

当日は、佐藤が「規範／古典としての『文選』」として、まず全体の趣旨説明を行い、続けて陳、中木が「『文選』の規範化とその問題点」として、『文選』の規範化を視座としつつ、唐宋期の詩文と『文選』との距離を改めて問い直し、『文選』及びその李善注に基づく

中国古典文学の再解釈について問題を提起する。さらに川島、高西は「規範／古典としての『文選』と各文学領域との距離」として、規範／古典としての『文選』と近世白話小説との距離、説話の中の『文選』（語られる『文選』）について、それぞれ問題を提起する予定である。

IV-5 次世代シンポジウム 武人・武官と文学

中国文学における武人・武官の重要性はこれまでほとんど認識されてこなかった。『三国志演義』『水滸伝』などの白話小説についても、武人はあくまで題材と見なされ、彼らが小説自体の成立に主体的に関わったという見方はされていない。しかし、白話小説を生む土壌となった演劇・芸能が軍隊や武人と深く関わることは、すでに指摘されている通りである。そして、演劇・芸能を担う演じ手たちは、通常社会的に差別される人々であり、その観客たちの多くは声なき民衆であった。「好人不当兵」という諺に象徴的に示されているように、中国においては武人たちも社会的に疎外されがちな人々であった。そして、演劇・芸能には、歴史書に見られる記述とは大きく異なる方向性を持つものが多く含まれる。歴史書においては、武人は制御しがたい粗野な存在とされることが多いが、楊家将や岳飛を主題とする演劇・芸能においては、愚直に忠誠を尽くす武官を文官が迫害するという構造が繰り返して現れる。また、武官を優遇した明の武宗正徳帝は、史書では暗君とされるが、演劇・芸能では、平民に変装して庶民と親しむ皇帝として肯定的に描かれる。こうした齟齬は、歴史書の制作者が知識人であることに由来する。

宋代以降、科挙官僚が支配層を形成する体制を取ってきた中国においては、文字文献は基本的に知識人視点に基づいて作られてきた。実際には、人口比からすれば知識人以外の人々が圧倒的多数を占めており、彼らは知識人とは異なる視点を持っていたにもかかわらず、発信手段を持たないため、その声が表面することはほとんどなかったのである。しかし、明代後期に至り、白話小説の本格的な刊行とともに、声なき声が文字の世界に現れてくることになる。そして、そこから不特定多数の読者を対象とする文学

○小松 謙（京都府立大学）

井口 千雪（九州大学）

岡崎 由美（早稲田大学）

松浦 智子（神奈川大学）

作品の制作・刊行という近代的な文学行為が広まる。何がこれを可能にしたのか。

近年、『三国志演義』『水滸伝』の刊行にあたって大物武官郭勛が重要な役割を果たしたこと、『金瓶梅』や元雜劇テキストの流布に明の秘密警察である錦衣衛の武官が関わっていたこと、明代における各地の楊氏が楊家将と系譜をつなげようとし、それが白話小説の刊行と関連していることなどが明らかになってきた。これらは、武人・武官が白話小説の成立と流布に深く関わっていたことを示唆するものである。

今回は、武人を題材とする白話文学は何を目的に制作・刊行され、社会にいかなる影響を及ぼしたのか、その過程で武人・武官はどのような役割を果たしたのか、関与した知識人は武人・武官とどのような関係にあったのかについて考えるところにも、本来身体的表現であった「武」が文学言語化されていく過程、その演じ手の性格が文学に及ぼした影響をも論じることにより、声なき人々の声が現れてくる過程を再現してみたい。

第五会場

第七十回大会記念シンポジウム

世界的視野から見た中国学

この日本中国学会第七十回大会記念シンポジウムでは、グローバル化が進展する時代において、中国学がどのような姿を示しているのかを考えてみたい。オリエンタリズムとその内面化である内なるオリエンタリズムに対する反省を踏まえて、世界の中国学は新しいフェーズに入りつつある。アメリカから中国哲学と人類学を専門とするマイケル・ピュエット (Michael Puette) 教授 (INALCO) のバード大学)、そしてフランスから中国言語学を専門とするクリスティーン・ラマール (Christine Lamarre) 教授 (INALCO) のお二人をお招きし、それぞれの観点から中国学の歴史と現在、そして今後の展望についてお話ししていただく。国際的に活躍するお二人は日本の中国学にも造詣が深く、このシンポジウムを通じて、日本の中国学がより一層、世界の中国学との対話へと開かれていくことを期待したい。

マイケル・ピュエット「グローバルな視野から中国哲学を考える」

真にグローバルな哲学を展開するとはどういうことなのだろうか。世界中の文化において、自己について、人間を豊かにすることについて、多くの理論が生みだされてきた。それらを真剣に受け取り、今日の世界において支配的になっている理論との対話に置くにはどうすればよいのだろうか。この大きなプロジェクトにさまざまな貢献をするために、ここでは古典中国の伝統において展開された政治的かつ解釈学的な理論について論じてみたい。古典中国の理論は今日の議論に多くのことを提供するはずである。

ピュエット教授略歴…ハーバード大学東アジア言語文明学部教授 (中国史担当のウォルター・コンラッド・クライン講座)。シ

カゴ大学の人類学部で学び、一九九四年に博士号を取得した。主要著作に、『創造の両義性——古代中国におけるイノベーションと作為』（スタンフォード大学出版会、二〇〇一年）、『神となる——古代中国における宇宙論、犠牲、自己神化』（ハーバード大学アジアセンター、二〇〇二年）、アダム・B・セリクマン、ロバート・P・ウエラー、マイケル・J・ピュエット、ベネット・サイモン『礼とその帰結——真摯さ「誠」の限界について』（オックスフォード大学出版会、二〇〇八年）がある。クリスティーン・グロスローとの共著『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』（熊谷淳子訳、早川書房、二〇一六年）は、日本でもベストセラーとなった。

クリスティーン・ラマール「シノロジィから言語科学まで——ヨーロッパの中国語学の多様性」

ここではまず、ヨーロッパの中国研究における学術領域のあり方、主な学会の特色、高等教育機関・研究機関の研究環境を概観する。その上で、中国語学という学術分野における二十年來の動きを振り返る。とりわけフランスの状況に焦点を当て、中国語学における学術ネットワークを詳細に紹介する。それは、シノロジィに繋がりが古典学とも接点の多い中国語学の分野から、方法論にしても研究課題にしても言語科学の一部として位置づけた方がよい中国語学の分野にまでわたるものである。このような幅広い研究がいかなる意義を有しているのか、そして今後の展望と直面する問題にも触れてみたい。

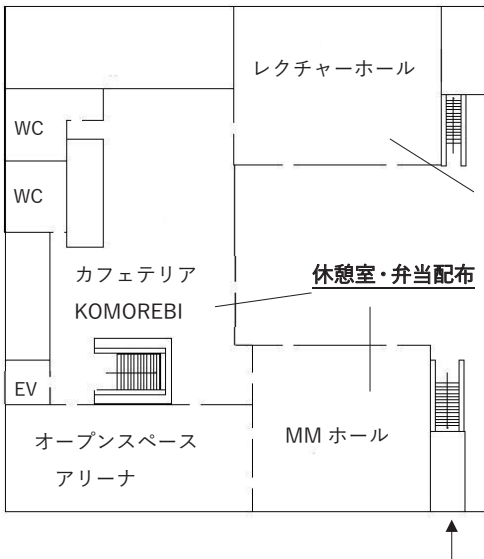
ラマール教授略歴：INALCO (Institut national des langues et civilisations orientales) 教授。INALCO の副所長を二〇一三年から二〇一七年まで務める。前職は東京大学総合文化研究科教授である。中国語学をフランス・日本・中国の観点から論じている。主要著作に、『客家語の文法と語彙——バーゼル・ミッション図書館の歴史資料』（ヒラリー・チャペルとの共著、EHSS、二〇〇五年）、『漢字圏の近代——ことばと国家』（村田雄二郎との共編、東京大学出版会、二〇〇五年）、『このころと言葉——進化と

認知科学のアプローチ』（長谷川寿一、伊藤たかねとの共編、東京大学出版会、二〇〇八年）がある。

司会 中島 隆博（東京大学）

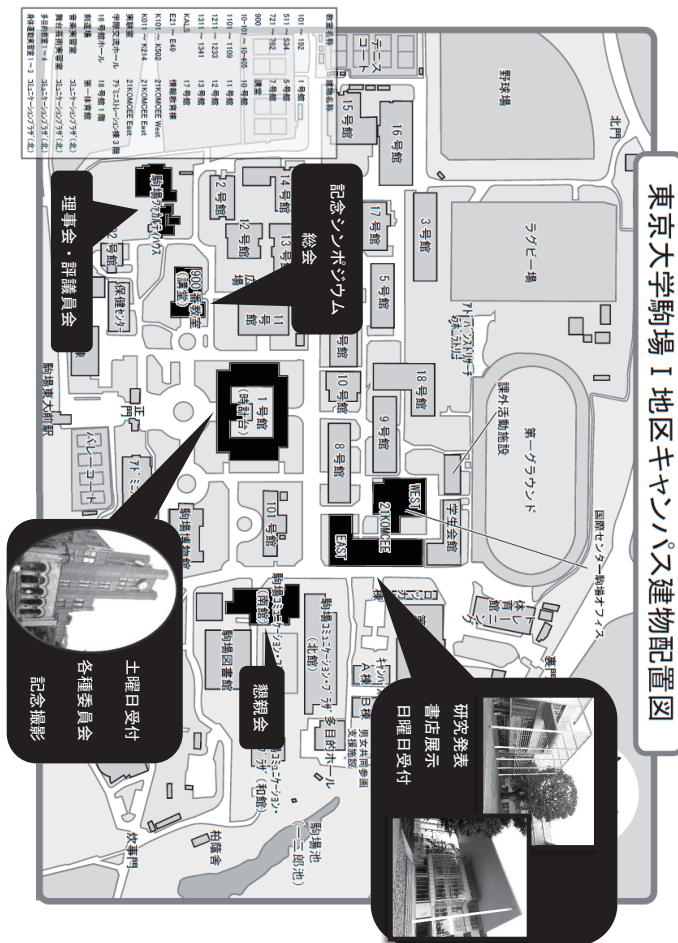
ピュエット教授の講演は英語で行われます。講演原稿の日本語訳を準備いたします。ラマール教授の講演は日本語で行われます。

West B1F



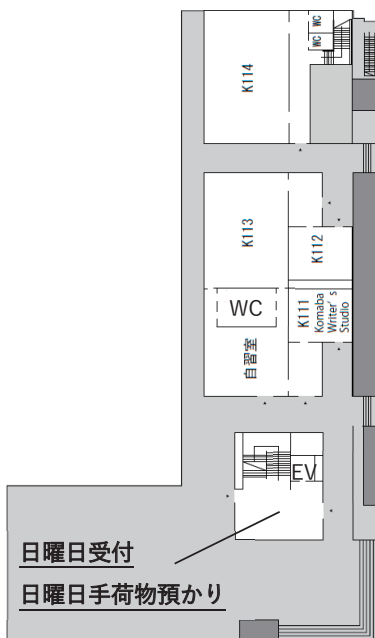
第四会場
開会式・閉会式
雨天時記念撮影

大会会場案内図



東京大学駒場 I 地区キャンパス建物配置図

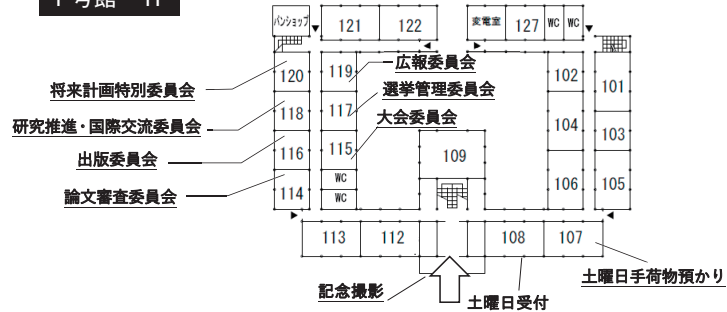
East 1F



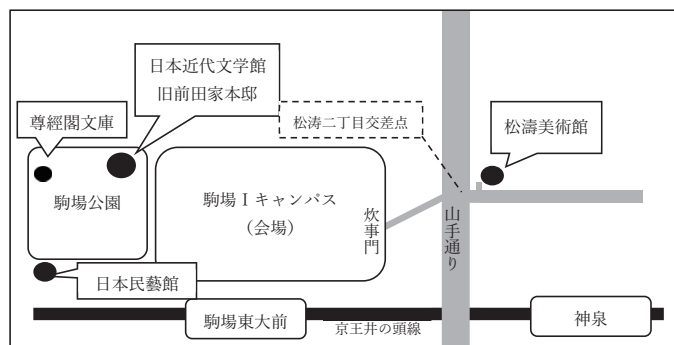
East 2F



1号館 1F



近隣案内（昼休みの散策にご利用ください）



①日本民藝館

9月11日（火）～11月23日（金）

「白磁」

住所：目黒区駒場 4-3-33

電話番号：03-3467-4527

休館日：月曜日（祝日を除く）

開館時間：10：00～17：00

会場からのアクセス：徒歩約7分

②駒場公園

住所：目黒区駒場 4-3-55

○日本近代文学館

9月1日（土）～10月6日（土）

「浅草文芸、戻る場所」

電話番号：03-3468-4181

休館日：日曜日・月曜日、第4木曜日

開館時間：9：30～16：30

会場からのアクセス：徒歩約9分

○旧前田家本邸 洋館・和館

電話番号：03-3466-5150

休館日：月曜日・火曜日（祝日を除く）

開館時間：9：00～16：30

会場からのアクセス：徒歩約9分

③松濤美術館

10月6日（土）～11月25日（日）

「林原美術館所蔵 大名家の能装束と能面」

住所：渋谷区松濤 2丁目 14-14

電話番号：03-3465-9421

休館日：月曜日（祝日を除く）、祝祭日の翌日（土日を除く）

開館時間：10：00～18：00（金曜のみ 20：00 まで）

会場からのアクセス：徒歩約10分 または京王井の頭線神泉駅
下車徒歩約5分

託児室のご案内

今大会では託児室を設置致します。希望される会員は以下の要領でお申し込みください。

1. 概要

・ご利用資格

本大会に参加される会員で、満2ヶ月から小学生までのお子様をお持ちの方。

・委託業者

日本中国学会が、下記のベビーシッター業者と契約して業務を委託します。

株式会社 ポピンズ

〒150-0012 東京都渋谷区広尾5-6-6 広尾プラザ5F

Tel : 03-3447-2100 Fax : 03-3447-1812

・開設時間

10月6日(土) 9:30～18:00

10月7日(日) 9:30～16:00

・開設場所

駒場キャンパス内に開設します。当日受付時にご案内致します。

・ご負担額(当日、受付にてお支払いください)

半日(午前のみ、もしくは午後のみ):1,500円

全日:3,000円

・保険

万が一の事故に備え、委託業者が保険に加入しています。補償については、保険会社の規定の範囲内となります。

なお、日本中国学会並びに東京大学は、事故等に対する責任を負いかねます。

2. お申し込み

・予約方法

振込用紙での申し込みは受け付けておりません。

大会準備会にメールで、①ご希望の日時、②お子様の人数と年齢、③申込者氏名、④携帯電話番号をお知らせください。また、お子様にアレルギーがある場合は、⑤アレルギー物質に関する情報をあわせてお知らせください。折り返し、メール添付にて書類をお送り致します。

申し込み期限は、9月26日(水)です。期限を過ぎてのお申し込みや、事前申し込みなしでのご利用はできませんので、ご承知おきください。

・予約の変更

キャンセルや時間の変更などは、お早めにご連絡ください。当日の急な発病などによる変更でも、できる限り対応致します。

3. 当日の諸注意

・受付

大会受付に、託児窓口を設けます(1日目と2日目とで受付の場所が異なりますので、ご注意ください)。料金をお支払いいただいた後、担当者が託児室までご案内致します。

・お持ちもの

1. 保護者の身分証明書(運転免許証、健康保険証、母子手帳等)
2. あらかじめお送りする「託児利用申込書」(前もってご記入ください)・「保護者の皆様へ」(資料)
3. 託児に必要なもの(お食事・お飲み物・おやつ・ミルク・哺乳瓶・おむつ・着替え等)

・お迎え

原則としてお預けと同じ方をお願い致します。再度受付にお越しください。身分証明書をご呈示いただきます。託児室へは、担当者が同伴致します。

・ご注意

熱がある場合、体調不良の場合は、お預かりできないことがあります。ご了承ください。

その他、あらかじめお送りする「保護者の皆様へ」をご覧ください。

4. お問い合わせ先

大会準備会:japansinology70@gmail.com

ご不明の点をご遠慮なくお問い合わせください。